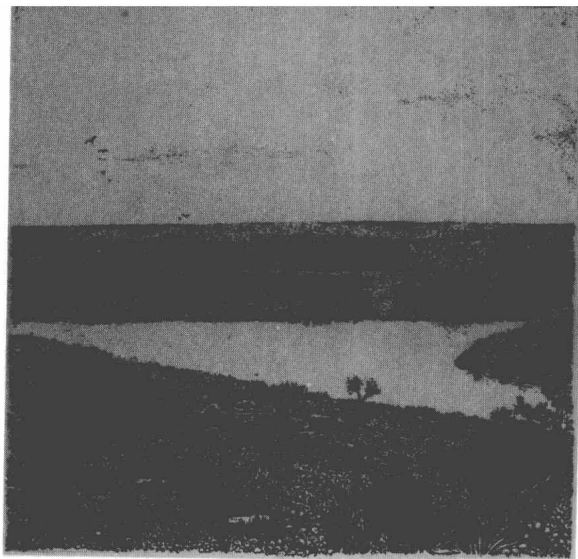


村稔詩集

空の
岸辺

青土社



詩集 空の岸辺

©1980, Minoru Nakamura

一九八〇年六月一〇日印刷

一九八〇年六月二〇日発行 1092—20004—3978

著 者——中村稔

発行者——清水康雄

発行所——青土社

東京都千代田区神田神保町一—二九 市瀬ビル 下101

☎二九一—九八三一（編集） 二九四—七八二九（営業）

印刷所——新興印刷

製本所——美成社

空の
岸辺
目次

I 挽歌

時間の迷路

夜の魚

樹

驟雨の前に

II 李朝水滴

六月

八月

III ふたつの風景

樹木が歩きだす風景

旧い仲間たちの風景

37 33 27 23 17 13 9 5

IV ある埋葬まで

火葬場にて

花冷え

51 45

V また鵜原を

岩礁にて

晩夏の海に

61 57

VI 空の岸辺

冬の森林公園にて

空の岸辺

71 67

VII 旧作一篇

虹

77

空の 岸 辺

駒井哲郎「時間の迷路」1952 (図)

「平 原」1971 (扉)

I
挽
歌

駒井哲郎に

時間 の 迷 路

時間は

ちぎれて歪んだ方形の連続であり

また散乱する球形や円錐形の断片であり

あるいは董色をおびた白であり

建物の翳をやどすねずみであり

そうしたさまざまの空間がかたちづく

ある秩序に似ている。

その秩序は

じつは黒の微妙に変わりゆく濃淡であり

その濃淡に心がざわめき

ざわめく心が見遣っているものは

さまざまの空間の隙間から

逃げ去ってゆく幻

その幻が闇にみちびく迷路である。

ああ

その迷路の一隅に

咲いていたはずの堇がひからび

噴水も錆びついてもう久しい。

街では僧侶がわめきちらしているが

さっきまで走りまわっていたねずみたちの

死骸が屋根裏にかくされていることは

誰も知らない。

あの光るものは

火葬場で拾い忘れた

死者の歯の金冠でもあろうかと

死者を嘆いて

途方にくれているとき

私もまた

時間の迷路の点景のひとつ

黒の濃淡にまぎれゆく生物であることを

知ることとなる。

夜の魚

部屋の隅で光っているものがあり

日がない一日私は気にかけている。

夜、私のまわりの空気が稠密になり

透きとおったこまかな顆粒の流れとなり

その流れが部屋にみち

私の中からだから数匹の魚がぬけだし

暗い水槽の底を泳ぎはじめる。

ちいさな背鰭をふりながら

ゆっくりと魚が泳いでいると

水はやがて水銀のように重くなるので

魚たちは次々に水面に浮きあがり

天井にちかく

白い腹をあおむけに漂っている。

夜が明けると部屋の隅に

魚たちの鱗が落ちこぼれ

落ちこぼれて光っている。

日常のなかに私は魚たちを忘れている。

部屋の隅で光っているものを

日がない一日私は気にかけている。